

H.P.ベルラーへの建築理念と意匠的特質に関する研究

宇田 直史

目 次

I. 序論

第1章	はじめに	p.7
1-1.	本論文の概要	
1-2.	オランダ国内におけるベルラーへの認知度	
1-3.	ベルラーへの生涯	
第2章	既往研究の成果及び問題点	
2-1.	海外におけるベルラーへ研究の系譜	
2-1-1.	ベルラーへに関するモノグラフ	
2-1-2.	ベルラーへと同時代の建築家研究の中でベルラーへを位置づけた論考	
2-1-3.	ベルラーへの個々の建築作品を対象とした論考	
2-1-4.	ベルラーへの著書や雑誌投稿論文を再録又は翻訳し解説を加えたもの	
2-1-5.	オランダの近代建築や都市計画研究の中でベルラーへを位置づけた論考	
2-1-6.	オランダ文芸運動研究の中でのベルラーへに関する論考	
2-1-7.	オランダの建築に対する外国の建築家の影響という視点の研究	
2-1-8.	その他	
2-2.	国内におけるオランダ近代建築・都市計画研究	
2-3.	近代建築通史におけるベルラーへの位置づけ	
2-4.	既往研究の成果における問題点の整理	
2-5.	本論文の目的及び範囲	
第3章	研究方法及び一次史料所在地	

Ⅱ．本論

- 第1章 19世紀末から第一次世界大戦までのオランダの近代化 p.39
ー政治、経済、都市、文化における動向ー
- 1-1. はじめに
 - 1-2. オランダの政治と労働運動
 - 1-3. オランダの経済と工業化
 - 1-4. オランダの人口と都市問題
 - 1-4-1. オランダの人口
 - 1-4-2. 1902年の「住宅法」(Woningwet)
 - 1-4-3. 住宅組合の設立と集合住宅建設への建築家の関与
 - 1-5. 19世紀末以降のオランダ文芸運動
- 小括
- 第2章 ベルラーへの周縁の建築グループの理念的・造形的特徴に関する考察 p.59
- 2-1. はじめに
 - 2-2. ベルラーへと同時代に単独で活動した代表的な建築家
 - 2-3. アムステルダム派
 - 2-3-1. アムステルダム派の誕生
 - 2-3-2. アムステルダム派とベルラーへの共通性と差異
 - 2-3-2-1. アムステルダム派の理念的特徴
 - 2-3-2-2. アムステルダム派の建築作品の造形的特徴
 - 2-3-3. アムステルダム派についてのまとめ
 - 2-4. デ・スタイル
 - 2-4-1. デ・スタイルの誕生
 - 2-4-2. デ・スタイルとベルラーへの共通性と差異
 - 2-4-2-1. デ・スタイルの理念的特徴
 - 2-4-2-2. デ・スタイルの建築作品の造形的特徴
 - 2-4-3. デ・スタイルについてのまとめ

2-5. 機能主義 (デ・アフト、デ・オップバウ、デ・アフト・エン・オップバウ)

2-5-1. オランダにおける機能主義の誕生

2-5-2. 機能主義者 J.ダウカーとベルラーへの共通性と差異

2-5-2-1. 機能主義者 J.ダウカーの理念的特徴

2-5-2-2. 機能主義者 J.ダウカーの建築作品の造形的特徴

2-5-3. 機能主義についてのまとめ

小括

第3章 ベルラーへの「普遍性」の理念を軸とした思想の展開に関する考察

p.95

3-1. はじめに

3-2. 19世紀末オランダの文芸運動

3-2-1. 『新道案内』誌における個人主義と社会主義の対立

3-2-2. 『クロニクル』誌における個人主義批判

3-2-3. フェビアン主義とアーツ・アンド・クラフツ運動の影響

3-3. ベルラーへの思想的立場の諸相

3-3-1. ベルラーへの「普遍性」の理念と社会民主主義への傾倒

3-3-2. ベルラーへが社会民主主義にみたキリスト教的精神

3-3-3. オランダにおけるユートピア思想の受容

3-3-4. アール・ヌーヴォーとオランダのニーヴェ・クンストの差異

3-4. ベルラーへと「コミュニティ・アート」

3-4-1. 「コミュニティ・アート」の理想と立場の相違

3-4-2. ベルラーへにとっての「コミュニティ・アート」の理想

3-5. ベルラーへと「合理主義」、「ザッハリッヒカイト」

3-6. ベルラーへと「標準化」

3-6-1. オランダにおける工業化の進展と住宅不足

3-6-2. ベルラーへと「標準化」

小括

- 4-1. はじめに
- 4-2. 第一次世界大戦がオランダの知識人に与えた影響
- 4-3. 『人類の神殿』
- 4-4. 『私のインド旅行』
 - 4-4-1. 『私のインド旅行』のこれまでの取り扱い
 - 4-4-2. 『私のインド旅行』以前
 - 4-4-2-1. ベルラーへの蘭領東インドへの関わり
 - 4-4-2-2. 蘭領東インドにおけるオランダ統治の歴史
 - 4-4-2-3. 蘭領東インドにおける建築の近代化
 - 4-4-3. 『私のインド旅行』に関する考察
 - 4-4-3-1. 出版までの経緯と旅行の概要
 - 4-4-3-2. H.マクライネ・ポントと H.トーマス・カールステン
 - 4-4-3-3. ボロブドゥールとプランバナンに関する考察
 - 4-4-3-4. バリ島に関する考察

小括

- 5-1. オランダの地層
- 5-2. ベルラーへの建築作品の系譜
- 5-3. ベルラーへと建築原理（1）－建築の原理に立ち返ることの意義－
- 5-4. ベルラーへと建築原理（2）－「構築性」と「囲繞性」－
- 5-5. ベルラーへの建築原理に基づく意匠の特質
 - 5-5-1. 1880年代の意匠的特徴
 - 5-5-2. 1890年代初頭の意匠的特徴
 - 5-5-3. 1890年代半ば以降の意匠的特徴（建築原理への志向）
 - 5-5-4. 1890年代末～1900年代初頭
レンガ組積造における「構築性」と「囲繞性」の調停

5-5-5. 証券取引所以降～第一次世界大戦まで
住宅建設と「標準化」

5-5-6. 第一次世界大戦終結後～晩年
鉄筋コンクリート架構式構造における「構築性」と「囲繞性」の調停

小括

Ⅲ. 結論

p.211

卷末資料

- ・参考文献一覧
- ・公刊されたベルラーへの著書の一覧
- ・一次史料（著書、新聞記事、雑誌、図面、ドローイング等）の紹介

おわりに

謝辞

I. 序 論

第1章 はじめに

1-1. 本論文の概要

ヘンドリック・ペトルス・ベルラーヘ (Hendrik Petrus Berlage, 1856-1934) は、P.J.H.カウペルス (Petrus Josephus Hubertus Cuypers, 1827-1921)、T.ファン・ドゥースブルフ (Theo van Doesburg, 1883-1931)、G.リートフェルト (Gerrit Thomas Rietveld, 1888-1964)、J.J.P.アウト (Jacobus Johannes Pieter Oud, 1890-1963) らとともに19世紀末から20世紀初頭のオランダを代表する建築家であり、一般的にはオランダ近代建築の父として認識されている。ベルラーヘは建築家、都市計画家、工芸家、大学等の講師として活躍し、数多くの建築作品と著書、講演録、雑誌投稿論文、新聞投稿文等を残している。代表的な建築作品としては、アムステルダム証券取引所(1903年)やハーグ市立美術館(1935年)が挙げられる。本論文は、現地調査、及びこれらの建築作品の設計図面や文献等の一次史料に基づいて、ベルラーヘの建築理念について体系的に考察した上で、その建築作品の意匠的特質と建築理念との対応関係について考察を試みた作家研究である。

序論第1章では、まず本論文の概要を述べ、次に日本国内においてはあまり馴染みがないと思われるH.P.ベルラーヘという人物について、現在のオランダ国内における一般的な関心の度合いについて紹介し、次にベルラーヘの生涯について、既往研究において明らかにされている事柄とともに、ベルラーヘの孫にあたるマックス・ファン・ローイ氏(Max van Rooy)との面接を通じて得られた知見を加えた上でその概略を年代記的に整理し、最後に本論文の構成を提示する。第2章では、まず既往研究の成果を整理して問題点を抽出し、次に本論文の目的と範囲を規定する。第3章では、研究方法、及び本論文の執筆にあたって入手した一次史料の内容と所在地を示す。

本論第1章では、ベルラーヘの多様な思想の社会的背景を捉えるため、19世紀半ばから第一次世界大戦頃までの間のオランダ社会について、政治、経済、工業化、労働組合運動、社会主義運動、住宅・都市問題、文芸運動等の相互関係の考察を通じて、オランダ社会のあらゆる側面における急激な変動の様相を考察する。

第2章では、ベルラーへの建築理念と意匠的特質をより鮮明にするため、ベルラーへを取り巻くアムステルダム派、デ・ステイル、機能主義といった建築グループとの理念的、造形的水準における共通性と差異について考察を行う。

第3章では、序論第2章で指摘した既往研究における問題点を踏まえ、ベルラーへの著書、講演録等の一次史料の言説を整理し、その多様な思想や概念を系統的に考察し、そこに通底する建築理念を捉える。

第4章では、既往研究では取り扱われてこなかったベルラーへの中期から晩期にかけての建築思想の把握を試みる。まず、第一次世界大戦がオランダの知識人に与えた思想的影響を考察し、次にベルラーへが1923年に蘭領東インドを訪れた際の紀行である『私のインド旅行』を中心に考察を行い、建築理念を明らかにする。

第5章では、ベルラーへの建築作品の意匠的特質について考察を行う。まず、ベルラーへの建築作品を定石的な系譜の捉え方によって概観し、次に、第3章の考察を通じて明らかになったベルラーへの建築理念との対応関係から意匠的特質について論じることにより、これまで断絶的に捉えられてきたベルラーへの建築作品の系譜を連続的に考察する。

結論では、研究成果及び各章の考察結果の要約をもって本論文全体のまとめとする。

1-2. オランダ国内におけるベルラーへの認知度

オランダ国内におけるベルラーへの一般的な認知度は、アムステルダムを中心として非常に高い。これは、ベルラーへだけでなく、他のオランダの代表的な建築家にも言えることではあるが、日本国内における日本の代表的な建築家の一般的な認知度の低さと比較すると、オランダ国民の芸術に対する関心が非常に高いことを示すものとも思われる。ベルラーへの認知度の高さについては、幾つかの要因が考えられる。代表作となった「アムステルダム証券取引所」(1903年)は、「ベルラーへの取引所」(Beurs van Berlage)と呼ばれ、現在はオランダ・ユネスコ歴史的建造物トップ100 (Top 100 der Nederlandse UNESCO-monumenten) のうちの一つとされて保存され、現在もオーケストラ・ホールや各種イベントの会場として利用されており、しばしばメディアによって取り上げられている。ベルラーへが設計したアムステル川に架かるアムステルダム南部の橋は「ベルラーへ橋」(Berlage Brug)と呼ばれており、そこを起点とした約5平方キロの広大な「アムステルダム南地区」(Amsterdam Zuid)は、ベルラーへがマスタープランを策定したこと

で知られており、その中の2つのメインストリート（ルーズベルト大通りとチャーチル大通り）の交差点にはベルラーへの大きな立像が建てられている。ベルラーへが設計した建築作品は、アムステルダム市内だけで29件が現存し（表1）、その多くがベルラーへの作品として一般のアムステルダム市民に認識されている。また、オランダを代表する日刊全国紙の『De Telegraaf』紙、『Algemeen Dagblad』紙、『De Volkskrant』紙、『NRC Handelsblad』紙、『Trouw』紙、1977年以降はアムステルダムの地方紙となった『Parool』紙等において、今もなお文化や芸術等の様々なトピックの中で頻繁に取り上げられており¹、こうしたことなどが、オランダ国民の間でのベルラーへの高い知名度に貢献していると思われる。また、ベルラーへに関するエッセイや写真集等の書籍がほぼ毎年のように出版されていること（表2）は、ベルラーへが今なおオランダ国民の関心の対象であり続けていることを示していると言えよう。

1-3. ベルラーへの生涯

ここではまず、ベルラーへの生涯について、既往研究において明らかにされている事柄とともに、元 NRC 記者であり、建築に関する著書も出版している、ベルラーへの孫にあたるアムステルダム在住のマックス・ファン・ローイ氏（Max van Rooy, 1942-）との面接を通じて得られた知見を加えた上でその概略を年代記的に示したい。

ベルラーへは、1856年にアムステルダムの中流階級家庭に生まれた。母方の家系には、芸術的、学問的な才能を持つ人物がいたことが分かっている。ローイ氏によると、幼少期のベルラーへはおとなしく、非常に真面目な性格で、強い精神力の持ち主であったという²。ベルラーへは1874年に高等学校を卒業後、アムステルダム芸術アカデミー（Rijksakademie van Beeldende Kunsten）に入学して画家としての訓練を始めた。しかし、ベルラーへは画家としての適性が不十分であると考えて建築への転向を決意し、1875年8月にはスイス連邦高等専門建築学校（Bauschule of Eidgenössische Polytechnische Schule：現スイス連邦工科大学チューリヒ校）に入学した。ベルラーへはここで、1871年まで教壇に立っていたゴットフリート・ゼンパー（Gottfried Semper, 1803-1879）の思想を間接的に学んだと言われている。1878年7月に卒業した後、1879年の春から1881年の夏までの間、ベルラーへはドイツ、イタリアへのグランド・ツアーを行っている³。



図 1-1 : イタリアでのグランド・ツアー中のベルラーヘと友人たち

ベルラーヘは 1881 年にアムステルダムに戻ると、土木技師であり、後に北オランダ路面鉄道会社 (Noord-Hollandsche Tramweg-Maatschappij) の取締役も務めたテオドルス・サンデルス (Theodorus Sanders, 1847-1927) の事務所に勤務する。ベルラーヘは、勤務後まもなくサンデルスから設計を任されるようになり、3年後の 1884 年半ばにはサンデルスと対等のパートナーになっている。サンデルスと共に働いていた間のベルラーヘは、オランダ・ルネサンス様式、イタリア・ルネサンス様式、ネオ・ルネサンス様式、ゴシック様式などの過去の建築様式に従って設計していた。その後ベルラーヘは 1887 年 7 月 28 日にマリー・ビエンファイト (Marie Bienfait, 1864-1937) と結婚し (子供は娘三人、息子一人に恵まれた)、1889 年には建築家として独立した。

独立後の 1890 年代のベルラーヘは、建築、絵画、彫刻、音楽等の芸術が調和的に協働すると同時に、社会に奉仕する芸術を目指すという「コミュニティ・アート」(Gemeenschapskunst) の理想を目指した「90 年代の運動」に賛同するとともに、『クロニクル』誌を通じて、ヘンリ・ポラク (Henri Polak, 1868-1943) やヘンリエッテ・ローラント・ホルスト (Henriette Roland Holst-van der Schalk, 1869-1952) といった社会民主主義者と交流し、社会民主主義への関わりを強めていく。ベルラーヘについて言及しているものによく見られる誤解であるが、社会民主主義への関わりと

いっても、ベルラーヘは社会民主主義労働者党（*Sociaal Democratische Arbeiders Partij*: SDAP）の党员にはなっておらず、政党活動を行っていたわけではなかった。



図 1-2：ベルラーヘと家族（1904年）

ベルラーヘにとって最大の転機となったのは、近代建築通史でもベルラーヘの代表作としてしばしば取り上げられるアムステルダム証券取引所（1898-1903）の設計に従事したことである。アムステルダム証券取引所の設計に携わり始めたのち、ベルラーヘの元には多くの設計依頼が寄せられる。まず、オランダの保険会社 *De Nederlanden van 1845* と、その社長の御曹司であったカレル・ヘニー（*Carel Henny*）は、ベルラーヘに保険会社事務所（アムステルダム：1894年、ハーグ：1895年、ロッテルダム：1910年、ネイメーヘン：1911年、バタフィア：1913年、ハーグ：1925年、ユトレヒト：1930年）や自邸（1898年、1912年）など数多くの案件を依頼しており、ヘレネ・クレラー・ミュラー（*Helene Kröller-Müller*）と共にベルラーヘの生涯に亘る最大のパトロンの一となった。次に、全オランダ・ダイヤモンド労働者組合（ANDB：*Algemene Nederlandse Diamantbewerker's Bond*）の議長であり、オランダ社会民主主義労働党（SDAP：*Sociaal Democratische Arbeiders Partij*）の創設者の一人であったヘンリ・ポラークからは、全オランダ・ダイヤモンド労働者組合本部の設計を依頼されている。

アムステルダム証券取引所の竣工後、1907年以来の不況の影響もあり、設計活動は活発ではなかったが、1911年以降は、当時の大きな社会問題であった住宅不足の問題を解消するための国家的な住宅建設のプロジェクトに携わることで、社会に奉仕する社会芸術としての建築家の存在意義を訴えてゆく。また、アムステルダム南地区、ハーグ、ユトレヒトの都市計画のマスタープランの策定にも携わっている。

ベルラーへはシカゴのルイス・サリヴァン事務所の所員であった W.G.パーセル (William Gray Purcell) からの度重なる招待を受け、1911年の年末にアメリカ旅行を行っている。ベルラーへは各地で講演を行い、またライトやサリヴァンの建築作品のうちいくつかを見学しており、とりわけライトのラーキンビルを賞賛している。

住宅建設へ積極的に従事し始めた直後の 1913 年には、大財閥のクレラー・ミュラー一家の夫人ヘレネ・クレラー・ミュラー専属の「お抱え建築家」となる契約を交わしており、ベルラーへはアムステルダムからハーグへと居を移している。契約期間中には、他の設計依頼を受けることは認められていなかったが、住宅建設と都市計画の案件は例外とされた⁴。契約期間中にも関わらずアムステルダムの低所得者用住宅や集合住宅の建設に携わっているのはそのためである。クレラー・ミュラー家との契約期間中の代表作としては、フンデルローの広大な森林地帯に建てられた、聖フベルトゥスの伝説を参照したベルラーへの作品の中でも特に例外的に幻想的な性格を持つ聖フベルトゥス・ハンティング・ロッジ (Het jachthuis Sint Hubertus, 1914-1920) を挙げることができる。この契約は第一次世界大戦終結後の 1919 年まで続いた。

ベルラーへはヘレネ・クレラー・ミュラーとの契約解消後もハーグにとどまり、晩年までこの地で過ごしている。この時期に設計された代表的な作品は殆どが鉄筋コンクリート造である。その試みは、ハーグのキオスク (1924-25) にはじまり、Nederlanden van 1845 (1920-27)、アムステルダムのメルカトール・プレインの集合住宅 (1924-27) キリスト教科学教会 (1925-26)、ハーグ市立美術館 (1927-35)、などを挙げることができる。ベルラーへはハーグ在住中の 1923 年に蘭領東インドを訪れたり、1929 年にロシアも訪れている。ベルラーへはハーグにおいて 1934 年 8 月 12 日に逝去した。

第2章 既往研究の成果及び問題点

ここでは、オランダを中心とした海外におけるベルラーヘ研究の系譜、日本国内におけるオランダ近代建築・都市計画研究におけるベルラーヘの取り扱われ方、近代建築通史におけるベルラーヘの位置づけ等の既往研究の成果を踏まえ、既往研究における問題点の所在を明らかにし、本論文の目的と範囲を規定する。

2-1. 海外におけるベルラーヘ研究の系譜

ベルラーヘについての関心が高まりを見せたのは、ベルラーヘが1934年に亡くなって十数年後の1950年代に、ベルラーヘの代表作であるアムステルダム証券取引所（通称ベルラーヘの取引所）が、かねてから進行していた圧密沈下により、建物全体が崩壊の危機に晒された頃にさかのぼる。オランダ国内では、莫大な国費を投じて建物を修復すべきかどうかについての議論が起こり、1959年には解体することが一度は決定されたが、1961年には歴史的建造物として保存することが最終的に決定されたという経緯があり、そうした社会を巻き込んだ議論を契機として、ベルラーヘはオランダ建築史上、都市計画史上の研究対象として認識されるようになった。

オランダを中心とする海外におけるベルラーヘに関する既往の主な研究としては、ベルラーヘ研究の第一人者である P. シングレンベルフ (Pieter Singelenberg)、M. ボック (Manfred Bock)、ベルラーヘと同時代の建築家 K.P.C. デ・バーゼル (Karel Petrus Cornelis de Bazel) の研究で知られる A.W. レイニンク (Adriaan Wessel Reinink)、同じくベルラーヘと同時代の建築家 J.L.M. ラウヴェリクス (Johannes Ludovicus Mathieu Lauweriks) に関する研究で知られる N.H.M. ツンメルス (Nic.H.M. Tummers)、英国のベルラーヘ研究者である I.B. ホワイト (Iain Boyd Whyte) らの研究が挙げられる。海外でのベルラーヘに関連する研究は、その内容によって以下のように分けることができる。以下に、この区分ごとに研究を概観してゆく。

- (1) ベルラーヘに関するモノグラフ (2-1-1)
- (2) ベルラーヘと同時代の建築家の研究の中でベルラーヘを位置づけた論考 (2-1-2)
- (3) ベルラーヘの個々の建築作品を対象とした論考 (2-1-3)

- (4) ベルラーへの著書や雑誌投稿論文を再録または翻訳し、解説を加えたもの (2-1-4)
- (5) オランダの近代建築や都市計画研究の中でベルラーへを位置づけた論考 (2-1-5)
- (6) オランダの文芸運動研究におけるベルラーへに関する論考 (2-1-6)
- (7) オランダの建築に対する外国の建築家の影響や共通性に着目した論考 (2-1-7)
- (8) その他 (2-1-8)

2-1-1. ベルラーへに関するモノグラフ

P.シンゲレンベルフによるモノグラフ

ベルラーへを対象としたモノグラフに最初に取り組んだのはオランダの建築史家 P.シンゲレンベルフ (Pieter Singelenberg, 1918-2007) である。シンゲレンベルフは 1965 年からベルラーへについての本格的な調査を開始し、1971 年にユトレヒト大学において『H.P.Berlage : Idea and style : The Quest for Modern Architecture』という表題で学位論文を提出し、同じ表題で 1972 年に出版されたもの⁵が、ベルラーへの思想と作品に関する初の研究成果として広く認知されている。その中でシンゲレンベルフは、ベルラーへの略歴や作品について年代記的に紹介するとともに、ゴットフリート・ゼンパー (Gottfried Semper) やヴィオレ・ル・デュク (Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc) といった建築家や、カント (Immanuel Kant)、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel)、ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer) といった哲学者がベルラーへの思想と建築作品に与えた影響について考察している。しかしながら、シンゲレンベルフは、1898 年から 1903 年の間の期間を「オランダの建築にとって最も決定的である」とした上で、「ベルラーへの思想は 20 世紀初頭以降は全く変化していない」⁶と述べているとおり、シンゲレンベルフが対象としているのは、建築作品としては 1903 年に完成しベルラーへの代表作となった「アムステルダム証券取引所」までであり、建築思想としては、殆どが『建築における様式の考察』(1905 年) と『建築の原理と発展』(1908 年) という、ベルラーへの主要な 2 冊の著書のみを中心として考察が進められており、その他の著書については、断片的に引用されているのみである。また、シンゲレンベルフはゼンパーやル・デュクの影響について考察する一方、イギリスの影響を否定している。シンゲレンベルフは自ら、1903 年から 1934 年までのベルラーへの建築思想と実践、家具のデザイン、応用芸術についての研究は別になされる必要があると明言している⁷。

M.ボックによるモノグラフ

次にベルラーへのモノグラフに本格的に取り組んだのは、ドイツの社会民主主義研究者で建築史家のマンフレート・ボック (Manfred Bock) である。ボックは 1972 年からベルラーへに関する調査を開始し、1980 年にベルリン自由大学において『新しい建築の始まり：19 世紀末オランダ建築文化におけるベルラーへの貢献』(Anfänge einer neuen Architektur. Berlag's Beitrag zur architektonischen Kultur der Niederlande im ausgehenden 19. Jahrhundert) という表題で学位論文を提出して認められ、修正を加えて同様の表題で 1983 年に出版した⁸ (この出版されたものを以下『新しい建築の始まり』と略す)。ボックは、『新しい建築の始まり』において、シンゲレンベルフと同様に、主にアムステルダム証券取引所が竣工するまでのベルラーへの初期の作品について考察している。このモノグラフにおけるボックの目線は、マルクス主義を信奉する社会民主主義研究者としての目線である。「無私の社会主義者」として政治的理想と実践を一致させたとしてベルラーへを英雄視するそれまでの見方に反対し、ベルラーへの社会主義思想と行為の不一致を主張する。ボックは、様々なケースを挙げ、ベルラーへが公言した信念を裏切り、楽観主義という罪を犯したと主張する。実利主義的な動機がベルラーへの多くの行為の陰に潜んでおり、資本主義に対して哲学的な拒絶を表明する一方で営利を追求する私企業のために多くの設計を行っており、ベルラーへの都市計画が仰々しい公共施設を含んでいたのは、モニュメンタルな建物が最も引き合ったからであると指摘する。住宅改良を進めるために提案されたアムステルダム南地区の最初の拡張計画には、労働者の住居に相応しい区画はなく、ピクチャレスクな輪郭によって、ブルジョワの邸宅にのみ適した敷地を生んだという。ボックは建築家としてのベルラーへ活動の根底をなす社会経済的な文脈に文章の大半を割いている。また、ボックはドイツの都市計画の知識をもとに、ベルラーへのアイデアの様々な出所を考察している。要するにボックの関心は、ベルラーへの建築理念と建築意匠との一致ではなく、社会主義的理念と行為との一致にあった。ボックの視点は、建築理念と建築作品との繋がりを考察する意匠論に繋がるものではなかった。ボックのもう一つの論点は、ベルラーへを絶対的な存在と見ることによって、K.P.C.デ・バーゼル、J.L.M.ラウヴェリクスをはじめとして、W.C.パウエル (W.C. Bauer)、W.クロムハウト (W. Kromhout)、H.J.M.ヴァレンキャンプ (H.J.M. Walenkamp)、といったベルラーへ同時代の建築家たちの存在が希薄になってしまっている点を指摘する。しかしながらボッ

クは、ベルラーへの言説を横断的に検証してはいない。ボックの論調は、優れて批評性が強く、しばしば粗探しのようである。ベルラーへの建築作品の意匠的特徴に関しては、過去の歴史的建築との類似点や、同時代のドイツやフランスの建築との類似点などを指摘することに終始している。

2-1-2. ベルラーへと同時代の建築家の研究の中でベルラーへを位置づけた論考

A.W.レイニンクによる K.P.C.デ・バーゼル研究におけるベルラーへの位置づけ

オランダの建築史家 A.W.レイニンク (Adriaan Wessel Reinink, 1933-) は、ベルラーへと同時代の建築家 K.P.C.デ・バーゼルの作家研究を行っている。シンゲレンベルフの研究は、ベルラーへ研究の端緒ではあったが、同時代における他国との関連性に主眼が置かれており、オランダの社会・文化的環境や、ベルラーへの同僚建築家やベルラーへより後の建築家に関する考察に欠けていた。レイニンクが 1965 年に発表した『K.P.C.デ・バーゼル』⁹は、その点においてシンゲレンベルフの研究を補完する意味合いを持っている。それまでベルラーへの二番手に甘んじていたような同時代の他の建築家に注目することで、ベルラーへの相対化が行われたという意義もある。また、レイニンクの研究によって、世紀転換期のオランダにおいては、三角形分割や求積法を使った幾何学的な設計システムが実際の設計プロセスの中で普及していたという大きな特徴が明らかとなった。その中心人物は、J.L.M.ラウヴェリクス、K.P.C.デ・バーゼル、J.H.デ・フロートであり、ベルラーへは彼らからその手法を学び、アムステルダム証券取引所の設計における寸法の決定や立面の構成に用いている点を明らかにしている。しかしレイニンクは、デ・バーゼルの設計手法がベルラーへに与えた影響という視点に過剰に固執しており、ベルラーへよりも後の世代の建築家であるデ・バーゼルに対して、1890 年代の初頭のベルラーへの作品が与えた影響という視点に欠けている。

N.H.M.ツンメルスによる J.L.M.ラウヴェリクス研究におけるベルラーへの位置づけ

オランダの建築史家の N.H.M.ツンメルス (N.H.M.Tummers, 1928-) もまた、レイニンクと同様にベルラーへの相対化に寄与した研究者の一人であり、ラウヴェリクスに関するモノグラフ『J.L.M.ラウヴェリクス』(1968 年)¹⁰では、ラウヴェリクスの設計手法がベルラーへに与えた影響を考察している。そして、レイニンクと同様に、ツンメルスもま

たラウヴェリクス設計手法がベルラーへに与えた影響という視点に偏っている。ラウヴェリクスの功績が、歴史家や建築家によってあまり高く評価されてこなかったという点を指摘したことは大きな意義があるものと思われる。

2-1-3. ベルラーへの個々の建築作品を対象とした論考

A.W.レイニクによるアムステルダム証券取引所の研究

レイニクはまた、アムステルダム証券取引所に焦点を絞ったモノグラフにも取り組んだ。1898年から1903年の間に建設されたアムステルダム証券取引所は、プロジェクトの巨大さもあり、当時のアムステルダムにおいて注目の話題であり、多くの議論的であった。そうした背景を踏まえて、レイニクは、1974年に発表した『アムステルダムとベルラーへの取引所』¹¹において、アムステルダム証券取引所が当時の一般大衆、特に批評家によってどのように見られていたかについての考察を行っている。ベルラーへによるアムステルダム証券取引所建設までの歴史的な道のりについて述べた後、戯画によって表現された非言語的な表現による批評や他の建築家たちによる批評、「機関車」、「工場」、「恐竜」、「冬眠中のトカゲ」などと評された、大衆による批評について述べている。ルター派の新聞において、「もしキリストが地上にいたならば、ベルラーへの新しい建物を興味深く見るだろう。」と評され、キリスト教社会主義者の雑誌においては、「プロレタリアの精神の輝かしい表現である。」として称賛されたことなどを挙げ、最終的にアムステルダム証券取引所に対する批評を5つの種類に分けている。文脈によるもの、印象によるもの、(建築の)意図に関するもの、本質的なもの、そしてそれまでの伝統的な「規則」という規範に照らした批評である。ベルラーへよりも前の世代の偉大な建築家で「アムステルダム中央駅」(1889)の建築家としても知られるP.J.H.カウペルス(Petrus Josephus Hubertus “Pierre” Cuypers)は、ベルラーへが「建築の伝統的な規則を犯した。」として、それまでの「規則」という規範に照らして批評する一方で、ベルラーへが「現在の状況を踏まえて建築を分析している。」として文脈的な評価を行っているレイニクは考察する。またレイニクは、ベルラーへと同世代の建築家でアムステルダム中心部の「アメリカン・ホテル」(1902)の建築家として知られるヴィレム・クロムハウト(Willem Kromhout, 1864-1940)の批評は、アムステルダム証券取引所の最終案は、フィレンツェやシエナの広場を参照したものであるというもので、典型的な印象による批評であるとしている。またレイニクは、

H.J.M. ヴァレンカンプ (Hermanus Johannes Maria Walenkamp, 1871-1933) はベルラーへの意図について分析しているとしている。また、本質的な問題についても議論された様子が描かれている。レイニクは、世紀転換期において、主に4つの基準が批評に適用されたと見ている。モニュメンタリティ、ピクチャレスクネス、性質、簡素さである。中でも簡素さはアムステルダム証券取引所における最大の特徴であり、オランダ人自身の性格の中にあるカルヴィニスト的な要素と関連付けられたりしたことが指摘されている。また、ベルラーへの簡潔さの表現は、かならずしもアムステルダムの人々に受け入れられ、愛されていたわけではないことをレイニクは指摘する。

その他、アムステルダム証券取引所をテーマとして取り上げたものとしては、まず、W. クラメル (Walter Kramer) による『ベルラーへの取引所』(2003年)¹²がある。これは、アムステルダム証券取引所建設当時の写真を中心に社会文化的な背景や、1999年から2002年にかけて行われた基礎部分の大規模修復工事の様子を解説したものである。また、M.ボックらによる『ベルラーへの取引所のインテリア』(1996年)¹³やT.エリエンス (Titus Eliëns) による『H.P.ベルラーへ：インテリアのデザイン』(1998年)¹⁴は、アムステルダム証券取引所の家具、照明、カーペット等のインテリアについて豊富な図版を交えて解説を行ったものである。D.カスター (Daniel Castor) による『ベルラーへの取引所を描く』(1996年)¹⁵は、オリジナルの図面では存在しない断面パースを筆者が描くことを通じて建物の空間的特徴を考察したものである。また、ハーグ市立美術館について書かれた『ハーグ市立美術館』(1982年)¹⁶は、ハーグ市立美術館の設計が開始された1919年から竣工した1935年まで、さらに1961年に美術館の拡張が行われるまでの美術館の歴史を図面と写真により振り返ったものである。J.ファン・エスら (J. van Es) による『ベルラーへ最後の作品』(2000年)¹⁷は、1995年から1998年にかけてハーグ市立美術館の全面改修が行われた際に出版されたもので、先の『ハーグ市立美術館』と同様、美術館の歴史を豊富な図面と写真によって振り返り、また改修工事の様子、展示されている品々を紹介している。

S.ポラーノによるベルラーへの建築作品の網羅

セルジョ・ポラーノ (Sergio Polano) は、ベルラーへの建築作品や都市計画プロジェクトの解説目録 (catalogue raisonne) として『H.P.ベルラーへの全作品』(1987年)¹⁸を出

版する。この解説目録は、ベルラーヘが学術的な研究対象となった 1970 年代以降では初めてベルラーヘの建築作品を網羅的に紹介しようとしたもので（ベルラーヘの存命中には J.フラタマがベルラーヘの建築作品の解説を含む写真集を出版している¹⁹）、本論文をはじめとするその後のベルラーヘ研究に対して、常に参照することのできる事典的な存在として大いに資するものであったと考える。J.フラタマの写真集と比べると情報が詳細に記載されており、作品名、住所、クライアントに加え、建設の背景などについても詳しい解説がなされている。この中でイタリアの建築史家でフィレンツェ大学教授のジョバンニ・ファネッリ（Giovanni Fanelli）、オランダの建築史家でアムステルダム大学教授のヴィンセント・ファン・ロッセム（Vincent van Rossem）、オランダの建築史家ヤン・デ・ヘール（Jan de Heer）らがそれぞれエッセイを書いている。この本では、ベルラーヘは 19 世紀の伝統と 20 世紀のモダニズムを架橋した媒介者として描かれている。ファネッリは、ベルラーヘの作品は伝統から突然隔絶されることはなかったと主張する。ファン・ロッセムは「ベルラーヘと都市計画の文化」と題してベルラーヘの 1900 年から 1914 年までの都市計画（特にアムステルダム南地区とハーグ）について考察を行っている。そして、オーストリアの建築家・都市計画家カミロ・ジッテ（Camillo Sitte）の影響から、ドイツの歴史家 A.E.ブリンクマン（A.E.Brinckmann）の幾何学的、バロック的な方向性への変化を見ている。また、「通りに沿って並ぶ住宅は、個性的な邸宅とは逆に、統一的な印象を与えるべきである」というベルラーヘの考えに対しては、ブリンクマンの考え方が大きく影響したと指摘している。ポラーノのこの本は、ベルラーヘの全作品を網羅したという点において資料的な価値は大きいと思われるが、網羅することが目的であり、建築理念や意匠に関する体系的な考察はなされていない。

その他、ベルラーヘの建築作品を網羅的に紹介したものとしては、次のようなものが挙げられる。R.ブレイストラ（Reinder Blijstra）の『ハーグのベルラーヘ』（1971 年）²⁰は、ベルラーヘが、アムステルダムの作品によって一方的に評価されてきたとして、ハーグにおけるベルラーヘの建築作品の豊富な写真を通じてその重要性を説いている。R.フェルベイクらによる『ハーグのベルラーヘ』（1990 年）²¹は、ハーグにおけるベルラーヘの建築作品を図版を含めて網羅したガイドブック的な本である。M.ボックらによる『アムステルダムのベルラーヘ』（1992 年）²²は、アムステルダムにおけるベルラーヘの建築作品のみを網羅したガイドブック的な本である。

2-1-4. ベルラーへの著書や雑誌投稿論文を再録又は翻訳し解説を加えたもの

I.B.ホワイトと W.デ・ヴィットによるベルラーへの著書の翻訳

建築史家のイアイン・ボイド・ホワイト (Iain Boyd Whyte) と建築・美術研究者のヴィム・デ・ヴィット (Wim de Wit) らの『H.P.ベルラーへ：様式の考察』(1996年)²³は、ベルラーへの1886年から1909年までの間の雑誌投稿記事、著書(蘭語や独語によるもの)の中から7つを選んで英語に翻訳を試みたものである。それらの著書を選択した理由は示されていない。ベルラーへは1909年以降も多くの著書と作品を残しているし、それらの著書にはベルラーへの思想的な変化が見られるため、この選択には疑問が残る。まず、ベルラーへは1900年代の半ばから1920年代後半にかけて、労働者を社会・文化的環境の中で建築的にどう位置づけるかという課題に直面していたことを理解するためには『住宅建設における標準化』(1918年)²⁴は欠くことのできない著書である。『社会における美』(1919年)²⁵は、建築の社会において果たすべき役割についてのベルラーへの思想を明らかにするために必要な著書である。第一次世界大戦に直面し、平和主義的思想を展開していったことを理解するためには『人類の神殿』(1919年)²⁶を取り上げなければならない。ベルラーへが1923年に初めて東洋の地(蘭領東インド)を訪れ、大きな影響を受けた体験を綴った『私のインド旅行』(1931年)²⁷や、ベルラーへが1890年代から依拠してきたマルクス主義への疑念を表明した『建築と社会主義』(1932年)²⁸は、ベルラーへの晩期の建築理念を理解するうえで非常に重要な著書である。さらに、I.B.ホワイトとW.デ・ヴィットが選択した期間(1886年から1909年)の間に出版された『建築と工芸における様式』²⁹(1904年)も、ゴットフリート・ゼンパーの思想やアーツ・アンド・クラフツ運動といったベルラーへに大きな影響を与えた思想について考察した重要な文献であるにも関わらず、取り上げられていない。こうしたことから、翻訳の対象となった本の選択に偏りが生じていることは否めない。

H.ファン・ベルヘイクによるベルラーへの雑誌記事の再録と未発表原稿の出版

ヘルマン・ファン・ベルヘイク (Herman van Bergejik) は、2003年に『ベルラーへの石』³⁰と題して、『アルヒテクトゥーラ』誌に掲載された記事の中から、『建築と印象主義』、『芸術における美は理想主義的か現実的か、主観的か客観的か』、『現代建築の性格』

といったベルラーへの初期の三つの記事を再録している。ベルヘイクは、2010年7月には、『イタリア旅行の追憶』³¹と題して、ベルラーへが1880年から1881年の間に行ったイタリア旅行の記録をまとめて出版している。

2-1-5. オランダの近代建築や都市計画研究の中でベルラーへを位置づけた論考

G. ファネッリによるオランダ近代建築研究

建築史家のジョバンニ・ファネッリ (Giovanni Fanelli) は、M.ボックと並んで、外国人としてオランダの近代建築に取り組んだ研究者である。ファネッリによる『オランダの近代建築』(1968年)³²は、オランダにおける近代建築についての最初の包括的な考察である。ファネッリ自身は、この研究を、将来のオランダ近代建築史のための予備的なものとして位置づけている。ファネッリは、世紀転換期から第二次世界大戦までの間の動向について、特にデ・ステイルと機能主義を中心に考察しており、ベルラーへは、P.J.H.カウペルス、J.M.ラウヴェリクス、K.P.C.デ・バーゼルらとともにその前史を形成した存在として位置づけられている。

D. グリンバーグによるオランダの集合住宅と都市計画に関する研究

米国の建築史家ドナルド・グリンバーグ (Donald Grinberg) は、G.ファネッリの次に外国人としてオランダの建築の研究に取り組んだ。『オランダの都市と集住』(1977年)³³は、今世紀前半(第二次世界大戦に至るまで)にオランダで展開されたハウジングについての模索のプロセスとその成果を歴史的に概観したものである。グリンバーグは、オランダには表現主義的で幻想性を求める「アムステルダム派」、合理主義的で客観性を求める「ロッテルダム派」や「デ・ステイル」、新即物主義の理念を提唱した「デ・アフト」や、「オップバウ」、そして伝統への回帰を主張した「デルフト派」等、さまざまな潮流が存在していたとし、こうしたスクールやグループの系譜を単純に区分するのではなく、それらに見られる表層的な差異よりも、深層に通底する類似性に着目し、労働者住宅は文化的価値を象徴する方法を模索していたという論点で考察が進められている。グリンバーグは、オランダの住宅の質を、統一的な文化の内部における多様な潮流の内に存在していたと結論している。しかし、グリンバーグは類似性を見出すことに力を入れるあまり、「文化的価値を

象徴する方法を模索したという点においては同じである」としてオランダの様々な建築運動を括ってしまったことによって、個々の違いを曖昧にしてしまった。

N.スティーバーによるオランダの住宅と都市に関する研究

アメリカの都市計画研究者ナンシー・スティーバー (Nancy Stieber) は、『アムステルダムハウジング・デザインと社会』(1998年)³⁴の中で、1902年の「住宅法」の施行以降、政府によって推進されたアムステルダムの巨大な住宅プロジェクトの中で、ベルラーヘのような建築家たちが、社会に奉仕するという自らの建築家としての役割を如何にして再定義したかについて考察を行っており、また、ベルラーヘが都市計画家として、オーストリアの建築家カミロ・ジッテの中世主義的な計画から、ドイツの建築家A.E.ブリンクマンのバロック的な方向に移行したと一般的に解釈されているとした上で、この教義に解釈された歴史的なアプローチが総合的なベルラーヘのアプローチの考察を妨げているとして、ベルラーヘがどのようにして都市の歴史を視覚的に表現しようとしたのか、ベルラーヘの都市の概念化を再度読み込むことを提案している。

その他の研究としては、例えばオランダの建築史家ハンス・ファン・デイク (Hans van Dijk) はオランダの19世紀末以降の近代建築を概観した『オランダの20世紀建築』³⁵(1999年)の中でベルラーヘをオランダ近代建築の父とし、同時代のヴァーグナー、ベーレンス、サーリネンらと共に、歴史的様式を払しょくし、合理的な基礎をもたらした人物として取り上げている。アメリカの建築家・建築史家のアラン・コルクハウン (Alan Colquhoun) は、『近代建築』(2002年)³⁶の中で、ベルラーヘをアール・ヌーヴォーの流れの中に位置づけている。オランダの建築史家P.フルーネンデイク (Paul Groenendijk) らの『オランダ建築ガイド：1900-2000』(2006年)³⁷の中では、やはりベルラーヘが歴史的様式を払しょくし、合理的な基礎をもたらした人物として通常認識されているとしながらも、ベルラーヘを神秘化するような見方は最近は少なくなっているとしている。

2-1-6. オランダ文芸運動研究の中でのベルラーヘに関する論考

オランダの美術史家リースケ・チッベ (Lieske Tibbe) は、詩人のR.N.ローラント・ホルストについての博士論文を編集したモノグラフ『R.N.ローラント・ホルスト』(1994年)

38の中で、R.N.ローラント・ホルスト（その妻のヘンリエッテ・ローラント・ホルストもまた詩人として有名で、やはりベルラーへの友人であった）が、芸術において理想と実用を両立するという矛盾を克服するために、社会によって共有された考えを反映する芸術として「コミュニティ・アート」(Gemeenschapskunst) に依拠したとし、ベルラーへのアムステルダム証券取引所を「コミュニティ・アート」(Gemeenschapskunst) のモニュメントとして位置づけている。

2-1-7. オランダの建築に対する外国の建築家の影響という観点の研究

アメリカの建築史家 A.アロフシン (Anthony Alofsin) の『フランク・ロイド・ライトの失われた年月:1910-1922』(1993年)³⁹や、アメリカの建築史家 D.ラングミード (Dobald Langmead) らの『建築の冒険:フランク・ロイド・ライト、ヨーロッパ、オランダ』(2000年)⁴⁰では、ライトがオランダの建築家をはじめとするヨーロッパの建築家に与えた影響について考察しており、その中ではベルラーへが後期の建築作品の中でライトをインスピレーションの源泉としていたことが仄めかされている。

2-1-8. その他

オランダ・フロニンヘン大学教授で建築史家の A.ファン・デル・ヴァウト (Auke van der Woud) は、2008年に小論『星屑:オランダ建築における百年の神話』⁴¹を発表し、ベルラーへは、同時代の支持者らによってオランダにおける建築の指導者として擁立されたのち、20世紀の建築史家らはその線を辿りベルラーへをオランダ近代建築の父として位置づける論調を無批判に繰り返し(「最初に混沌があり、そこにベルラーへが現れ、美しく、近代的で、良いものを突然もたらした。」という論調)、その結果としてベルラーへの存在が絶対化、神格化されたと述べた。さらにファン・デル・ヴァウトは、ベルラーへが優れた建築家であることは認めつつ、ベルラーへの名声は、アカデミックな研究に基づいたものではないとして、ベルラーへの研究の不十分さとともに、オランダ建築史が未完成の分野であることを指摘した。この小論自体はアカデミックな研究ではなく、問題点の指摘にとどめると明言する反面、ファン・デル・ヴァウトはベルラーへの「合理主義」は保守的な

側から来たもので、伝統や正統性を重んじ、その結果として個人の自由を軽んじたとして批判している。

2-2. 国内におけるオランダ近代建築・都市計画研究

日本の建築界にベルラーへの名を最初に知らせたのは、おそらく堀口捨己であろう。堀口捨己が1924年（大正13年）に出版した『現代オランダ建築』は、オランダの近代建築を日本へ紹介したことで知られるが、この中で堀口は、ベルラーへを「アカデミ派の様式建築に鋭い批判を加えて一つの新しい合法的な考えを建築に与えた（原文ママ）」⁴²建築家として紹介している。しかし日本国内においては、堀口によって紹介された以降にベルラーへに関する作家研究が本格的に行われたことはなく、したがってその実像は殆ど知られていない。日本国内でベルラーへに関して得られる知見は、（1）海外の近代建築史関係の著書の訳書、（2）ベルラーへの周縁の建築家に関する研究、具体的には、J.L.M.ラウヴェリクス（Johannes Ludovicus Mathieu Lauweriks, 1864-1932）やK.P.C.デ・バーゼル（Karel Petrus Cornelis de Bazel, 1869-1923）の体系的設計手法に関する研究、J.J.P.アウトに関する研究の中で言及された箇所、（3）アムステルダム都市計画研究の中で言及された箇所などに限られている。日本建築学会の学術講演梗概集や支部研究報告集の中にはベルラーへの名を表題に含むものが散見されるものの、いずれも海外の既往研究を部分的に翻訳して紹介する程度の水準にとどまっており、ベルラーへの作家研究と呼びうるものは存在していない。（1）からは、近代建築史においてベルラーへがどのように位置づけられているのかに関する知見を得ることができ、（2）および（3）からは、ベルラーへの造形理論としての体系的設計手法や、J.J.P.アウトによるベルラーへ批評、都市計画家としてのベルラーへに関する知見を得ることができるが、いずれも断片的なものにとどまる。

2-3. 近代建築通史におけるベルラーへの位置づけ

S.ギーディオンによる位置づけ

スイスの美術史家であるジークフリート・ギーディオン（Siegfried Giedion, 1888-1968）は、ベルラーへと親交があったとされている⁴³。ギーディオンによるベルラーへの評価は、「F.L.ライトをヨーロッパに紹介した人物」⁴⁴として肯定的なものと、後には、「前世紀の

建築家」⁴⁵という否定的なもの両方が見られる。前者については、ギーディオンはベルギーの建築家ヴィクトール・ブルジョワ (Victor Bourgeois, 1897-1962) から、「自分がブリュッセルで学生だった 1914 年から 1919 年の間、ベルラーへとライトだけが若い学生を魅了していた。」⁴⁶という話を聞いており、ベルラーへがアメリカから帰国後の 1912 年に行った展示会や講演会とそれに続く出版が、ヨーロッパにおけるライトの認知に決定的に重要であったとしている⁴⁷。後者については、ギーディオンは後に、「住棟」(Street Block) を明確に批判するようになり、ベルラーへのアムステルダム南地区の開発は通りと住棟によって構成されていることから、ベルラーへを前世紀の建築家として退けている。さらに、「ベルラーへのスキームは当時の中心的な困難性を反映している。時代に特有の問題に対して提供される解決策における新しい表現の手段に到達することの不可能性である。1902 年の (アムステルダム南地区の) プランの中に、(特に、そしてある程度 1915 年のプランにおいても) 我々は前の数十年間の定式と決別しようとするベルラーへの試みに連座する闘争を感じるのである。」(1954 年)⁴⁸と述べている。

H.R.ヒッチコックと P.ジョンソンによる位置づけ

「インターナショナルスタイル」という言葉を定義づけた二人は、「それぞれ固有のやり方で直前の過去と縁を切り、それぞれ固有の方向において積極的に意味のある要素—これらが過去 10 年間にわたって組み合わされてきた—を追及した」個々の建築家の内の一人としてベルラーへを位置づけ、その個々の建築家たちの作品を「半—近代的」と記す方が正確であるとし、様式的統合が実際に存在したのは第一次世界大戦後であったと述べている⁴⁹。

P.R.バンナムによる位置づけ

建築批評家のレイナー・バンナム (Peter Reyner Banham, 1922-1988) は、『第一機械世代の理論とデザイン』(1960)⁵⁰において、デ・スタイルの美学理論を考察する上での前史としてベルラーへを位置づけている。そして、ベルラーへの主張した真理を、1. 空間の優先、2. フォームを生み出すものとしての壁面の重要性、3. 組織的比例の必要性の三つとし、ベルラーへの理論を、「勃興中の非宗教的社会にふさわしい様式を与えるという秩序の枠内で、空間を壁によって処理するということ」であるとの理解を示している。また、H.ムテジウスとベルラーへの類似性、ベルラーへによる F.L.ライトのプロモーション

活動とオランダでの受容のされ方について考察を行い、ムテジウスになぞらえられたベルラーへの合理主義的な側面と、ベルラーへの意に反して未来派として捉えられた F.L.ライトが、デ・ステイルの素地を作ったとしている⁵¹。

L.ベネヴォロによる位置づけ

建築史家のレオナルド・ベネヴォロ (Leonardo Benevolo, 1923-) は、『近代建築の歴史 (History Modern Architecture)』(1971) の中で、ベルラーヘをアール・ヌーヴォーの建築家として、ヴィクトル・オルタ、アンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ、ヨゼフ・マリア・オルブリッヒ、ヨゼフ・ホフマンらと共に取り上げている。アール・ヌーヴォーの建築家として一括りにしてしまう取り上げ方には疑問を感じざるを得ないが、その記述は基本的には事実に忠実であり、主観的な評価はあまり含んでいない。デ・ステイルをベルラーへの合理主義（個人的な判断を最小限に減らすための正確な方法を作り出そうとした）の後継者と見做し、アムステルダム派を形態の選択をすべての法則から解放するような方向に発展しようとしたベルラーへの一側面の後継者と看做している⁵²。

K.フランプトンによる位置づけ

ケネス・フランプトン (Kenneth Frampton, 1930-) は、『テクトニック・カルチャー』⁵³の中で、構造材の意匠的特性を議論するために「テクトニック」（結構）という言葉を用い、シンケル、ベティヒャー、ゼンパーのラインを「テクトニック」の系譜とし、ベルラーヘをこの結構の伝統の中に位置づけている。ベルラーヘ自身、「鉄筋コンクリートによって建築結構術（テクトニック）が実現される」⁵⁴と述べているし、ゼンパーの建築原理に大きな影響を受けているため、この位置づけは正当なものと評価できる。ただし、ベルラーへの建築作品を「結構」が表れている対象としてのみ見ているため、ベルラーへの建築理念との関係については一切触れられていない。

D.シャープによる位置づけ

建築史家のデニス・シャープ (Dennis Sharp, 1933-2010) は、『合理主義の建築家たち』⁵⁵の中で、建築における合理主義が、アーサー・コーンのいう「透明なガラスの壁」のように、そこにあるがそこにはないもののように、捉えにくいものだとする。「建築に対する合理主義的、構造的アプローチ」がイギリスで生まれ、ヴィオレ＝ル＝デュクやショワジー

によって展開され、ペレやコルビュジェを通じてフランスで影響力を持ったとし、ベルラーヘをこの流れの中に位置づけるとともに、同時にゼンパーにも影響を受けていたとし、ゼンパーの影響を無視しようとするバンハムを批判している。

D.ワトキンによる位置づけ

デイヴィッド・ワトキン (David John Watkin, 1941-) は新古典主義の専門家であり、トーマス・ホープ (Thomas Hope, 1769-1831)、ジョン・ソーン (Sir John Soane, 1753-1837)、ジェームズ・スチュアート (James Stuart, 1713-1788)、チャールズ・コッカレル (Charles Robert Cockerell, 1788-1863) らに関する研究で知られている。日本では『モラリティと建築』⁵⁶ (1977) や『建築史学の興隆』⁵⁷ (1980) で知られており、前者の中で、第三部のタイトルを「ペヴスナー」としてニコラウス・ペヴスナーらによる近代建築解釈の方法論を批判している。ワトキンは、多くの近代建築家や批評家が、自らの美学的好みから選択した様式を、宗教・時代精神・技術・合理性等々といった「建築以外の何ものか」によって、倫理的に正当化してきたことを明らかにする。すなわち、建築は、建築に外在的な諸条件によってのみ決定されると考えられ、建築家は、この外在的価値理念に従うことを、倫理的責務と信じてきたとする。19世紀以来の近代建築は、このような倫理性 (モラリティ) に基づく決定論をパラダイムとしてきたと主張する。ワトキンは、ベルラーヘを、ヴィオレ・ル・デュク、ウィリアム・モリス、フランク・ロイド・ライト、ル・コルビュジェらとともに、「自らの作品を、材料の真実から生み出されたものと信じてきた」人物として挙げており、「にせものの材料と偽りの技術」を「非倫理的」とするペヴスナーの宣言と同一視している。ワトキンは、こうした「外在性」に対し、建築家の個人的美学と想像力の結晶としての建築を主張している。

このように、建築史家の D.ワトキンは、ベルラーヘを、N.ペヴスナーと並んで「モラリティに基づく決定論をパラダイムとしてきた人物」の一人として取り上げた。ファン・デル・ヴァウトはワトキンの論を紹介し、「デイヴィッド・ワトキンは 1977 年に既にネオ・ゴシックとモダニズムの間に強い一致があると考えていた。すなわち、建築は道徳的に“良く”あるべき、“公正”であるべきという考えである。」「19世紀のネオ・ゴシックの擁護者によくあるように、モダニストの戦略は、彼らの“新しい建物”は風変わりな想像の産物ではなく、純粋に合理的な、科学的に確実な分析の厳密に論理的な結果であると世界を説得させようとするメディア・キャンペーンであった。」と述べている。確かに、ベルラー

への信奉していた社会民主主義運動、あるいはロシアにおける共産主義運動というマルクス主義の二大運動に共通する社会主義実現論の特徴は、内田が述べているとおり、「第一に、自分たちの発見した一定の法則に従って社会が発展し、社会主義を必然的にもたらす、という歴史法則主義を信仰している」ことであるし、ベルラーへは社会民主主義の社会となることを望んでいたが、ワトキンの論もまた、個人的美学に依拠することの正当性の根拠を客観的に示し得てはいない。

2-4. 既往研究の成果における問題点の整理

既往研究から見出される問題点として、2-1.「海外におけるベルラーへ研究の系譜」より、ベルラーへ研究者の P.シンゲレンベルフと M.ボックのモノグラフにおける問題点としては以下の事柄を挙げるができる。1. 二人ともアムステルダム証券取引所までの期間しか扱っていない。2. P.シンゲレンベルフは、建築思想に関しては、殆どが『建築における様式の考察』（1905年）と『建築の原理と発展』（1908年）という、ベルラーへの主要な著書ではあるが、2冊の著書のみを中心として考察が進めており、その他の著書や講演録は殆ど考察の対象となっていない。3. M.ボックの関心は、社会主義的理念と行為との間の一致に向けられており、建築理念と建築意匠との関係の考察に繋がるものではなかった。4. ベルラーへの建築作品を網羅的に紹介した S.ポラーノらの『H.P.ベルラーへ：全作品』、R.フェルベイクらの『ハーグのベルラーへ』、M.ボックらの『アムステルダムのベルラーへ』は、資料的な意義は別として、特に前者は建築作品を網羅することに主眼が置かれ過ぎていて、体系的な視点に欠けていた。5. D.グリーンバークは、20世紀初頭のオランダにおける様々な建築の潮流の間に共通性を見出すことに力を入れるあまり、「文化的価値を象徴する方法の模索したという点においては同じである」として括ってしまったことによって、個々の違いを曖昧にしてしまった。6. ベルラーへの著書の再録や翻訳は、ベルラーへの重要ではあるが、一部の著書しか扱っていない。また、ベルラーへの著書を体系的に考察したものは存在しない。7. シンゲレンベルフはイギリスの影響を否定しているが、ベルラーへはラスキンやモリスの言葉をたびたび引用していること、近年では、オランダの美術史家リースケ・チッベ（Lieske Tibbe）が1890年代以降のオランダにおけるウィリアム・モリスの「ユートピアだより」が大きな影響力を持ったという研究を行っており、イギリスの影響を無視するわけにはゆかない。

2-2. 「国内におけるオランダ近代建築・都市計画研究」より、日本国内ではベルラーへの作家研究は行われていないことが分かった。

2-3. 「近代建築通史におけるベルラーへの位置づけ」より、R.バンハムはベルラーへの合理主義がデ・ステイルに繋がったとしている。L.ベネヴォロの場合、ベルラーへの合理主義がデ・ステイルに繋がったとする一方で、ベルラーへのアール・ヌーヴォー的な側面がアムステルダム派に繋がったとしている。しかしながら、これらの指摘は文献実証的になされているのではなく、両者の外面的な類似点に基づいた著者の主観的判断によるものである。また、建築家の個人的美学を擁護したD.ワトキンは、宗教・時代精神・技術・合理性等々といった建築以外の外在的価値理念に従うことを倫理的責務とした建築家たちの一人としてベルラーへを位置づけているが、これもまた、文献実証的な考察を踏まえたものではなかった。これらの中では、「結構」の系譜にベルラーへを位置づけたケネス・フランプトンの考察は、限定された観点ではあるが、公正なものとして評価できる。

2-5. 本論文の目的及び範囲

フロニンゲン大学建築史教授ファン・デル・ヴァウトの小論『星屑：オランダ建築における百年の神話』が示すように、最近のオランダ国内の傾向としては、ベルラーへを「世紀転換期オランダにおける非常に重要な建築家の一人」として相対化する傾向にある。本論文の目的は、ベルラーへをオランダ近代建築の父という絶対的な存在として祭ることではないので、ベルラーへの存在を相対化する方向性それ自体に異論を唱えるものではないが、そうした相対化が、はたしてベルラーへの実像を踏まえた上でなされているかどうかに関しては疑問が残る。また、ベルラーへが合理主義の建築家として、社会民主主義を信奉する建築家として、表現主義とされるアムステルダム派の拠りどころとして、というように様々に捉えられてきたことは、その評価が定まっていないことを意味しており、それは、一次史料に基づいてベルラーへの本質的な建築理念を実証的に論究するという基礎的な手続きが十分ではなかったこと、また、建築作品の意匠的特質について、建築理念との対応関係という観点から一貫した考察はなされてこなかった。

そこで本論文の目的は、第一に、ベルラーへの著書や講演録といった蘭語や独語の一次史料を精読したうえで多様な思想について体系的に論究し、そこに通底する建築理念を捉えることである。本論文の第二の目的は、ベルラーへの建築作品の意匠的特質について、

設計図面等の一次史料や現地調査を踏まえ、建築理念との対応関係から考察することである。すなわち、ベルラーへの多様な思想に対し、新たな視点から理念的枠組みを捉え、その理念のあらわれとしての意匠についての考察を試みたモノグラフということになる。なお、ベルラーへの詳細なバイオグラフィーやベルラーへの都市計画家としての側面については、本論文の範囲外である。序論の中で、ベルラーへの生涯について述べる中でそれらについて若干触れてはいるが、本論の内容には直接関連していない。また、本論文はベルラーへの本質的な建築理念を剔出することを通じて、この建築家の、少なくとも一つの統一的な姿を描くことを主な目的としており、本論文によってベルラーへの全てを解明することを目的とするものではない。

第3章 研究方法及び一次史料所在地

1-2.で述べたとおり、ベルラーへは今なおオランダにおいて関心を集めており、書籍、新聞などにおいて語られ続けている。その建築家としての全体像は徐々に明らかになりつつあるが、その建築理念の展開と意匠の特質について、体系的に考察したものは見られない。本論文ではまず、ベルラーへの著書、雑誌投稿論文、建築作品、ベルラーへに関して論じた雑誌記事、新聞記事といった蘭語や独語の一次史料を精読したうえで、多様な思想について論究し、そこに通底する建築理念を明らかにする。次に、建築理念を把握したうえで、ベルラーへの建築作品における意匠的特質との対応関係について、設計図面、ドローイング等の一次史料や現地調査を踏まえて考察する。設計図面やドローイング等については、ロッテルダム市にあるオランダ建築協会 (Nederlands Architectuur Institute : Nai) やアムステルダム市アーカイブ (Gemeente Amsterdam Stadsarchief) に整理され、収められているものを撮影した(複写は原則的に不許可)。ベルラーへの著書については、アムステルダム大学図書館 (Bibliotheek van de Universiteit van Amsterdam : UBA)、オランダ国立図書館 (Koninklijke Bibliotheek)、Nai において複写した。ベルラーへに関して論じた新聞・雑誌記事については、オランダ国立図書館、デルフト工科大学図書館 (TU Delft Library) で複写した。また、ベルラーへに関する直接的な情報を得るため、2009年3月25日に、ベルラーへの孫にあたるマックス・ファン・ローイ氏に面会し、インタビューを行った。

表 1 : アムステルダム市内に現存するベルラーへの建築作品

	建物名称, 住所	竣工年	建物用途
1	Focke & Meltzer, 152 Kalverstraat	1886 年	店舗兼事務所 (現在は書店)
2	Kerkhoven & Co., 115 Herengracht	1890 年	事務所
3	邸宅, 17 Egelantiersgracht	1891 年	邸宅
4	Dr.Pijzel 邸, 72 Baerlestraat	1892 年	邸宅 (現在は店舗兼事務所)
5	't Lootsje, 99 Roengracht	1892 年	飲食店、事務所、倉庫
6	Arti et Amicitiae, 112 Rokin	1894 年	社交クラブ
7	De Nederlanden van 1845, Muntplein	1895 年	店舗、事務所、スタジオ
8	店舗兼住宅, 30-32 Raadhuisstraat	1897 年	店舗、集合住宅
9	ダイヤモンド労働組合本部, 3-9 Henri Polakaan	1900 年	労働組合本部 (現在は労働組合博物館)
10	Koning & Bienfait, 104 Da Costakade	1900 年	建築材料実験施設 (現在は事務所)
11	アムステルダム為替事務所, 95 Damrak	1901 年	為替事務所 (現在は事務所)
12	アムステルダム証券取引所, Damrak, Beursplein	1903 年	証券取引所 (現在は多目的ホール)
13	新アムステル橋, Ceintuurbaan	1903 年	橋
14	Ons Huis, 8 Rozengracht	1904 年	体育館、クラブルーム等
15	店舗兼集合住宅, 4-8 Hobbemastraat	1904 年	店舗、集合住宅
16	店舗兼集合住宅, 74-96 Linnaeusstraat, 1-2 Pretoriusstraat	1905 年	店舗、集合住宅
17	邸宅, 148 Middenweg	1906 年	住宅
18	邸宅, 18 Koninginneweg	1907 年	住宅
19	集合住宅, 1-7 Toldwarsstraat, Tolstraat	1908 年	労働者用集合住宅
20	女子工芸学校, 16 Gabriel Metsustraat	1908 年	学校
21	集合住宅, 163-213 Sarphatisstraat	1908 年	集合住宅
22	集合住宅, 21-53 Tolstraat	1912 年	労働者用集合住宅
23	低層集合住宅, Transvaalplein	1912 年	低層集合住宅
24	低層集合住宅, Spreeuwenpark	1914 年	低層集合住宅
25	集合住宅, Javastraat, Balistraat, Molukkenstraat	1915 年	労働者用集合住宅
26	集合住宅, Gillis van Ledenberchstraat	1915 年	労働者用集合住宅
27	集合住宅, Mercatorplein	1927 年	集合住宅、ショッピングアーケード
28	アムステルダム銀行, 47 Rembrandplein	1932 年	銀行、店舗、事務所
29	ベルラーへ橋, Vrijheidslaan	1932 年	橋

表2：オランダ国内におけるベルラーヘに関連する過去10年の主要な出版物

タイトル	出版年	内容
Italiaanse reisherinneringen	2010年	ベルラーヘによるイタリア旅行記(1880-81)
Sterrenstof	2009年	近代オランダ建築の父としてのベルラーヘの評価の再考を提示したエッセイ
Beethoven in de Hollandse duinen	2008年	ベルラーヘの Beethoven House に関する論考
Amsterdam, het mekka van de volkshuisvesting	2007年	第一次大戦以前の労働者住宅に関する考察
Anton & Helene Kröller-Müller	2006年	大富豪でベルラーヘをお抱え建築家として雇ったクレラー・ミューラー夫妻に関する伝記
Leerdam glas 1878-2003	2004年	レールダムのガラス作品集
De steen van Berlage	2003年	ベルラーヘの1893,94年の雑誌記事の再録
De Beurs van Berlage : historie en herstel	2003年	アムステルダム証券取引所の歴史と修復
Het jachthuis Sint Hubertus	2003年	聖フベルトゥスの邸宅に関する論考
Hendrik Petrus Berlage: een bouwmeester in beeld	2002年	ベルラーヘの主要作品の写真集
De Burcht	2001年	ダイヤモンド労働者組合本部に関する論考
Beurs van Berlage	2001年	アムステルダム証券取引所の写真集
Het laatste meesterwerk van Hendrik Petrus Berlage	2000年	ハーグ市立美術館に関する論考

-
- ¹ これらの新聞のウェブサイトにあるデジタル・アーカイブで過去の記事が検索可能である。
- ² 2009年3月18日に、アムステルダム市内において、ベルラーへの末娘 Miep Marie van Rooy- Berlage の息子で、元 NRC 紙記者のマックス・ファン・ローイ (Max van Rooy) 氏に対して筆者らが実施したインタビューによる。
- ³ イタリア旅行中のベルラーへの記録やスケッチについては未発表であったが、2010年7月にデルフト工科大学教授で建築史家のヘルマン・ファン・ベルヘイクが『ベルラーへのイタリア旅行』という表題で発表している。
- ⁴ Polano, Sergio, Hendrik Petrus Berlage, Giovanni Fanelli, Jan de Heer, and Vincent van Rossem. *Hendrik Petrus Berlage, Complete Works*. New York: Rizzoli, 1988, p.222.
- ⁵ Singelenberg, Pieter. *H.P. Berlage. Idea and Style. The Quest for Modern Architecture*, Utrecht: Haentjens Dekker & Gumbert, 1972.
- ⁶ Singelenberg, *op. cit.*, p.XI.
- ⁷ Singelenberg, *op. cit.*, p.XII.
- ⁸ Bock, Manfred, *Anfänge einer neuen Architektur : Berlages Beitrag zur architektonischen Kultur der Niederlande im ausgehenden 19. Jahrhundert*, 's-Gravenhage, Holland : Staatsuitgeverij / Wiesbaden, Bundesrepublik Deutschland : Steiner, 1983.
- ⁹ Reinink, Adriaan Wessel. *K.P.C. de Bazel. Art and architecture in the Netherlands*, Amsterdam: J.M. Meulenhoff, 1965.
- ¹⁰ Tummers, H. M., *J. L. Mathieu Lauweriks: Zijn werk en zijn invloed op architectuur en vormgeving rond 1910: "De Hagener impuls"*, Hilversum: G. van Saane, 1968.
- ¹¹ Reinink, Adriaan Wessel, *Amsterdam en de Beurs van Berlage ; reacties van tijdgenoten = Amsterdam and Berlage's Exchange : contemporary criticism*, 's-Gravenhage : Staatsuitgeverij, 1975.
- ¹² Kramer, Walter. *De Beurs van Berlage: historie en herstel*. Zwolle: Waanders, 2003.
- ¹³ Bock, Manfred. *De inrichting van de Beurs van Berlage: geschiedenis en behoud*. Waanders monumenten reeks. Zwolle: Waanders, 1996.
- ¹⁴ Eliëns, Titus M., and Hendrik Petrus Berlage. *H.P. Berlage (1856-1934): ontwerpen voor het interieur*. Zwolle: Waaanders Uitgevers, 1998.
- ¹⁵ Castor, Daniel, and Hendrik Petrus Berlage. *Drawing Berlage's Exchange*. Rotterdam: NAI Publishers, 1996.
- ¹⁶ Berlage, H. P., and T. van Velzen, *Het Haags Gemeentemuseum: het museumgebouw van H.P. Berlage ; opgedragen aan P.A. Frequin, administrateur von 1947-1982*, The Hague Municipal Museum, 1982.

-
- ¹⁷ Berlage, Hendrik Petrus, and J. van Es, *Het laatste meesterwerk van Hendrik Petrus Berlage: de geschiedenis en restauratie van het Gemeentemuseum Den Haag*, VOM-reeks, 2000,3. Zwolle: Waanders, 2000.
- ¹⁸ Polano, Sergio, *op.cit.*
- ¹⁹ Berlage, Hendrik Petrus et al., *Hendrik Petrus Berlage. Boumeester: 230 Afbeeldingen van zijn werk met een inleiding door ir. Jan Gratama*, Rotterdam: Brusse, 1925.
- ²⁰ Blijstra, Reinder, *Berlage in 's-Gravenhage*, 's-Gravenhage: s.n, 1971.
- ²¹ Verbeek, Reinier, and Hendrick Petrus Berlage, *Berlage in den Haag: Berlage in The Hague*, The Hague: Dr. H.P. Berlage Foundation and the Municipal Bureau of Monuments and Sites, 1990.
- ²² Bock, Manfred, Jet Collee, Hester Coucke, and Maarten Kloos, *Berlage in Amsterdam*, Amsterdam: Architectura & Natura Press, 1992.
- ²³ Berlage, Hendrik Petrus, and Iain Boyd Whyte, *Hendrik Petrus Berlage: Thoughts on Style, 1886-1909. Texts & documents*, Santa Monica, CA: Getty Center for the History of Art and the Humanities, 1996.
- ²⁴ Berlage, Hendrik Petrus, *Normalisatie in woningbouw: Voordracht*, Rotterdam: W.L. & J. Brusse, 1918.
- ²⁵ Berlage, Hendrik Petrus, *Schoonheid in Samenleving*, Rotterdam: W.L. & J. Brusse, 1919.
- ²⁶ Berlage, Hendrik Petrus, and Henriette Roland Holst-Van der Schalk, *Het Pantheon der Menschheid*, Rotterdam: W.L. & J. Brusse, 1919.
- ²⁷ Berlage, Hendrik Petrus, *Mijn Indische reis: gedachten over cultuur en kunst*, Rotterdam: W.L. & J. Brusse, 1931.
- ²⁸ Treslong, H. van, M. Lobstein, Herman Petrus Berlage, and G.H. van Senden, Socialisme, kunst, levensbeschouwing. Door H. van Treslong (M. Lobstein), H.P. Berlage, G.H. van Senden [e.a.] In: *Religieus socialistische studien : uitg. van de Wetenschappelijke werkgroep voor religieus socialisme*, 3, Arnhem: van Loghum Slaterus, 1932.
- ²⁹ Berlage, Hendrik Petrus, *Over stijl in bouw-en meubelkunst*, Amsterdam: A.B. Soep, 1904.
- ³⁰ Bergeijk, Herman van, *De steen van Berlage: theorie en praktijk van de architectuur rond 1895*, Rotterdam: Uitgeverij 010, 2003.
- ³¹ Berlage, Hendrik Petrus, Herman van Bergeijk, and Hans Oldewarris, *Italiaanse reisherinneringen*, Rotterdam: 010, 2010.

-
- ³² Fanelli, Giovanni. *Architettura moderna in Olanda 1900-1940*. Raccolta pisana di saggi e studi, 22. Firenze: Marchi & Bertolli, 1968.
- ³³ ドナルド・I・グリーンバーグ(矢代真己訳)『オランダの都市と集住:多様性の中の統一 1900-40』, 住まいの図書館出版局, 1990年.
- ³⁴ Stieber, Nancy, *Housing Design and Society in Amsterdam: Reconfiguring Urban Order and Identity, 1900-1920*, Chicago: University of Chicago Press, 1998.
- ³⁵ Dijk, Hans van, *Twentieth-Century Architecture in the Netherlands*, Rotterdam: 010 Publishers, 1999.
- ³⁶ Colquhoun, Alan. *Modern Architecture*. Oxford history of art. Oxford: Oxford University Press, 2002, p.24.
- ³⁷ Groenendijk, Paul, and Piet Vollaard, *Architectuurgids Nederland: 1900-2000 = Architectural guide to the Netherlands : 1900-2000*, Rotterdam: Uitgeverij 010, 2006.
- ³⁸ Tibbe, Lieske, *R.N. Roland Holst: arbeid en schoonheid vereend : opvattingen over gemeenschapskunst*, Amsterdam: Architectura en natura, 1994.
- ³⁹ Alofsin, Anthony, *Frank Lloyd Wright--the Lost Years, 1910-1922: A Study of Influence*, Chicago: University of Chicago Press, 1993.
- ⁴⁰ Langmead, Donald, and Donald Leslie Johnson. *Architectural Excursions: Frank Lloyd Wright, Holland and Europe*. Contributions to the study of art and architecture, no. 6. Westport, Conn: Greenwood Press, 2000.
- ⁴¹ Woud, Auke van der, *Sterrenstof. Honderd jar mythologie in de Nederlandse architectuur*, Rotterdam: Uitgeverij 010, 2008.
- ⁴² 堀口捨己『建築論叢』, 鹿島出版会, 1978年, p.137.
- ⁴³ Langmead, Donald, et al., *op.cit.*, p.28.
- ⁴⁴ Giedion, Sigfried, *Space, time and architecture: the growth of a new tradition*, 1955, p.316.
- ⁴⁵ Moughtin, Cliff, *Urban Design: Green Dimensions*, Oxford: Butterworth Architecture, 1996, p.194.
- ⁴⁶ Giedion, Sigfried, *op.cit.*, p.316.
- ⁴⁷ Langmead, Donald, et al., *op.cit.*, p.28.
- ⁴⁸ Moughtin, Cliff, *op.cit.*, p.194.
- ⁴⁹ ヘンリー・ラッセル・ヒッチコック, フィリップ・ジョンソン (武沢秀一訳)『インターナショナルスタイル』, 鹿島出版会, 1978年.
- ⁵⁰ レイナー・バンナム著 (石原達二・増成隆士訳)『第一機械時代の理論とデザイン』鹿島出版会, 1976年.
- ⁵¹ レイナー・バンナム, 前掲書, pp.200-216.

-
- 52 レオナルド・ベネヴォロ（武藤章訳）『近代建築の歴史』，鹿島出版会，1979.
- 53 ケネス・フランプトン（松畑強・山本想太郎訳）『テクトニック・カルチャー：19-20 世紀建築の構法の詩学』，TOTO 出版，2002 年.
- 54 Berlage, H.P., *Gedanken über Stil in der Baukunst*, Leipzig: J. Zeitler Verlag, 1905, S.43.
- 55 デニス・シャープ編（彦坂裕ほか訳）『合理主義の建築家たち：モダニズムの理論とデザイン』，彰国社，1985 年.
- 56 デイヴィッド・ワトキン（榎本弘之訳）『モラリティと建築』，鹿島出版会，1981 年.
- 57 デイヴィッド・ワトキン（桐敷真次郎訳）『建築史学の興隆』，中央公論美術出版，1993 年.

図版出典

- 1-1. Nederlands Architectuurinstituut 内アーカイブ
- 1-2. Nederlands Architectuurinstituut 内アーカイブ
